Dale Pastoral Center
DPC ニュースレター
2024 年 6 月 15 日　第 12 号

# DPC10 年に思うこと

DPC 所長　齋藤　衛

2014 年 4 月デールパストラルセンターは発足いたしました。早いもので本年は創設 10 周年の年となります。主によってこれまでの働きが守られ支えられたことをおぼえ、感謝いたします。そして多くの方々のお力添えをいただいたことも、おぼえて感謝申し上げます。皆さまのご支援をありがとうございました。

本ニュースレターでは、感謝と共にしばし立ち止まり、振り返り、そしてこれからの歩みを見据えようと今号を編みました。誌面には 3 名の方々に、それぞれの視点から今後の課題と展望を示していただきました。感謝いたします。また、次号 12 月号ではこの 10 年の活動をまとめた内容で発行することとしています。本年のこの働きが 10 年の節目に立てられる今後への道しるべとなればと願っております。

発足時の私たちの活動の目的は「現代社会を生きる苦悩に寄り添う、教会の牧会のつとめをサポートすること」(ニュースレター創刊号) だと石居基夫前所長が書いています。現代に生きることで抱えざるを得ない「生きづらさ」を、どう教会が受け取り、分かち合い、それでも生かされる道をどう見出すか、そのサポートを目的としたのです。以来、教会を取り巻く状況は変化してきました。年々閉塞感を深める社会の在り方、教会員数・教職数の減少、そして covid-19 による打撃。生きづらさが教会の内外からじわじわと押し迫ってきたこの 10 年ではなかったかと思います。

継続されてきた働きの 1 つに牧会研究会があります。covid-19 によって 2020 年度は休止を余儀なくされましたが、それでも 1 日だけオンライン研究会を開催し、昨年亡くなられた堀肇先生を中心に難しい状況下での牧会を語り合いました。参加者の戸惑いや悩ましさをいつにも増して聴き合えた会となりました。

この 10 年間の牧会研究会の歩みを私なりに見てゆきますと、牧会を学ぼうとする姿はもちろん参加者に確固としてありますが、牧会を必要とする教職者自身の問題意識が目に見えて高まってきたように思われます。また教会の現状を見ますと、一人の牧会者が抱える責任の増加に伴い、疲弊する牧会者の姿が見られます。DPC 発足当初の目的は、10 年を経てさらに切実な求めとされていると言わざるを得ません。この現実に応える DPC であり続けることが私たちに求められていることだと、使命を新たにしているところです。

# DPC 創立 10 周年の節目に～「か・え・な・い・心」をもってキリストに従う

ルーテル学院理事長　　大柴　譲治

「すべての真実の生は出会いである。」（マルティン・ブーバー『我と汝』）

**その始まり**

デール・パストラル・センター（DPC）は 2014 年 4 月に誕生し、今年でちょうど 10 周年を迎えました。人間成長とカウンセリング研究所（PGC 1982～2012）の働きを受け取るようなかたちで発足のための準備会が始まりました。私は DPC の創設期にはむさしの教会の牧師であり、神学校でも「牧会学」と「臨床牧会教育（CPE）」を担当してきたこともあって運営委員の一員として関わらせていただきました。その後 2016 年春に大阪に転任したためしばらくご無沙汰しておりましたが、2022 年 5 月よりルーテル学院の理事長となって再び関わることになった次第です。

創設期、その命名に当たって私たちは「デール」という語に二重の意味を込めました。もちろんそこには PGC 初代所長のケネス・デール先生（1996 年に退任し米国帰国）のお名前をいただいて命名させていただきました。その時にジェームス・サック先生が 'dale' という語には「谷」（valley）という意味があることを示唆してくださり、詩編 23 編が豊かなパストラルイメージを保っているように私たちはそこに「緑の牧場、いこいのみぎわ」という意味を重ね合わせたのです。私自身は神学生時代にカナダの BC 州 Langley にある "Shephard of the Valley Lutheran Church" で 1 年間のインターンをしたことをも想起します。

**三本柱**

その働きには三本柱があります。①「パストラル」、②「スピリチュアル」、③「ソーシャル」の 3 つです。特に③は「グリーフワーク/グリーフケア」に焦点を当て、社会との接点での活動が強く意識されました。「だいじな人をなくした子どもの集まり＆だいじな人をなくした子どもの保護者のための集まり」の働きは、1998 年に PGC の時代から始まり、2 ヶ月に 1 度のペースで現在も続いています。

私自身は 2014 年より上智大学グリーフケア研究所での人材養成コースにグループワークのスーパーヴァイザーとして関わるようになりました。2015 年 2 月に行われた第 1 回臨床牧会セミナー（主題は「それでも、主を見上げて～牧会の光と闇～」。基調講演はルター研究所長の鈴木浩先生による「ルターと牧会」）ではグリーフケアの分科会を担当しました。

**か・え・な・い・心**

私はいつも日野原重明先生の「か・え・な・い・心」という言葉を想起します。それは対人援助職に大事な 4 つの姿勢を意味しています。①「かざらず」、②「えらぶらず」、③「なぐさめず」、④「いっしょにいる」という姿勢です。その頭文字を取ると「か・え・な・い・心」となります。①は来談者中心療法を提唱したカール・ロジャーズにも通じますが「正直であること」を意味し、②は「上から目線ではないこと」を示しています。デール先生がいつも高い背をかがめて相手と同じ目線の高さになろうとしていたことをも思い起こします。私たちに一番難しいのが③の「慰めない」です。相手を何とかして慰められないか、自分にできることはないかと私たちは考えるからです。しかし悲嘆の中にある人に安易な慰めは必要ありません。むしろその慰めのない孤独な現実の中に降りてきてただ黙ってそこにいて欲しいのです。これが難しいのは私たちの中に安易な

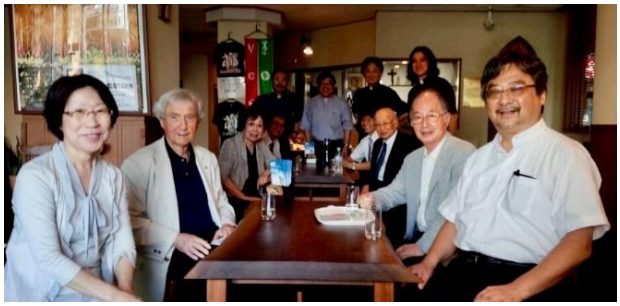
慰めに逃げようとする弱さがあるからでしょう。④その重たい沈黙は自己の無力さをトコトン味わわされる瞬間でもあります。しかしそこにただ相手と呼吸を合わせて一緒にいることが求められている。そのためには大きな覚悟とエネルギーが必要です。私自身はそこで「飼う者のない羊」のような群衆を深く憐れまれた主イエスのご臨在とそのリアリティに思いを向けたいのです。

**「出会い」のこと**

2014 年 7 月 26 日、DPC 創立記念シンポジウムが東京教会で開催されました。主題は「スピリチュアルペインとそのケア」。講師は賀来周一、ウァルデマール・キッペス、窪寺俊之という日本におけるスピリチュアルケアの第一人者の先生方でした。私が司会を仰せつかったために四苦八苦したことを昨日のことのように思い出します（右上写真参照）。この時の成果が、石居基夫（編）『スピリチュアルペインとそのケア』として出版されています（キリスト新聞社、2015）。皆さまにはぜひそれをお読みいただければと願います。その中でキッペス先生が人間の持つ「身体的」「精神的」「社会的」「spiritual（霊的）」ニーズに加えて、「全人的ケア」には「intellectual（知的）」ニーズもあると言われたことは私にとって目からウロコでありました。

2016 年 5 月 28 日の第 3 回 DPC デール記念講演会に当時 90 歳になられたケネス・デール先生を米国からお招きできたこともすばらしいことでした。デール先生は「21 世紀を生きる人間性の牧会的理解～90 歳をむかえて」と題してあの温かな声と柔和な笑顔で「宗教の基本は思いやり」と話してくださいました。これまでに発行された DPC ニュースはすべてルーテル学院のウェブサイトで読むことができます。

PGC と DPC を通して私たちには多くのすばらしい出会いが与えられてきました。ブーバーが「すべての真実の生は出会いである」と言うとおりです。私たちはルターの宗教改革運動が「贖宥券」という人々の魂の配慮に関する問題提起から



創立記念シンポジウムを終えて（右端筆者）

始まったことを知っています。大きく捉えるならば宗教改革運動とは「牧会者ルター」（石田順朗）によって始められた牧会運動でもあったのです。その流れを汲むルーテル学院において PGC や DPC の働きが地道に積み重ねられてきたことは当然であったとも申せましょう。これまでその働きに深く関わってきてくださったケネス・デール先生、賀来周一先生、ジェームス・サック先生、白井幸子先生、故堀肇先生らの貴いお働きに心から感謝いたします。「我と汝」の真実な出会いを通して私たちに注がれてきた「永遠の汝」からの「恩寵」に心から讃美を捧げたいと思います。

**そして、これから**

大学の新入生の定員未達が 3 年続いたことを受けて、3 月 21 日の理事会は 2025 年度からのルーテル学院大学と大学院の学生募集を停止することを決めました。それは 1964 年に大学設置が認可され、1969 年に鷺ノ宮から三鷹に移転してきて以来継続されてきた貴い働きを終えるという苦渋の決断でした。断腸の思い、「痛魂」の極みでもあります。数年をかけて大きなグリーフワークの過程が始まっています。DPC の今後もどうなるか未知数です。しかしこれが神による働きである限り、私たちの思いを遥かに越えて、人々のニーズに応える慰め主なる神の聖霊の働きが何らかのかたちで継続されてゆくことでしょう。お祈りいただければ幸いです。これまで、ルーテル学院は約 4 千人の卒業生を社会に送り出してきました。現在各地ですばらしい働きをなしてくださっている卒業生たちは私たちの誇りでもあります。皆さまの上に天よりの祝福をお祈りいたします。

# 「魂の配慮」と今日の教会

DPC 所員　石居　基夫

日本福音ルーテル教会は昨年 5 年ぶりに開催された全国総会で、第 7 次綜合宣教方策（以下、方策）を採択しました。コロナ後の宣教の方針を示すこの方策全体の重要キーワードが**「魂の配慮」**です。

デールパストラルセンターは、10 年前の設立の時から教会の牧会に仕え「現代社会を生きる人々の魂の問題に応え」ることを目的としてきました。本稿では、方策の言う「魂の配慮」が何を示そうとしているのか、確認してみたいと思います。

**【教会のリ・フォーメイションと牧会】**

今回の方策は、教勢拡大や経済的自給自立を目指すとは言いません。多くの課題を抱える教会が、現代日本においてどのように目指すべき**「教会の姿」**を共有できるかと、現実に即しながら、それでも確かな教会の**「リ・フォーメイション(再形成)」**を指し示そうとしているのです。**「ルター派に立つ教会」**として、同時にエキュメニカルな交わりにあるすべてのキリスト教会と共に全世界を一つの共同体とする教会の使命を確認するものと言えます。

その具体的な方法としては、**「牧師」**が**「信徒と共働しつつ、『目指すべき教会の姿』へと導く牧会者である」**と言い、**「『牧師』の牧会力の向上」**と**「信徒と協働しつつ牧会力の更なる強化」**が不可欠だと言います。つまりそれは、他でもなく**「教会の中で課題とされてきた『宣教力の低下』を、明確に『牧会力の低下』、『分かち合う力の低下』にその原因を見る」**という理解に立っているのです。

**【牧会を巡る教会の状況】**

教会の牧会力の低下には、牧師数の明らかな減少が背景にあることが示されています。方策には**「戦後宣教師を加えると 200 名近い教職が在籍していた時の教会数を、80 名前後の教職で担わなければならない」**状況が確認されていますが、現在ではさらに 70 名を割る牧師が現場を担っているのが実情なのです。神学校を卒業したばかりであっても、複数の教会や施設を兼牧・兼任することが普通となっているのです。主日礼拝を複数教会で担当するということは、礼拝以外の時間を信徒と共に過ごすということが物理的に制限されていることも見て取れるでしょう。

コロナ禍によって対面で人が集まることが困難となったこともあって、今各個教会の礼拝後の時間の過ごし方に大きな変化が起こっていることも実感されていることでしょう。本来、食事を伴う交わりの時に、牧師と信徒の関係が築かれ、自然な形での牧会があり、その牧師の存在の中でこそ信徒同士の牧会も起こる。牧師は、その交わりから一週間の祈りや訪問などの課題を受け取る。物理的に牧師の数が足りなくなっているということは、牧会そのものが教会から奪い取られている可能性があるということなのです。

**【魂の配慮】**

もともと、「魂の配慮」は、プラトンが用いた言葉に由来します。当時の多くの人たちが財産や地位などに配慮・関心をもって生活をしている状況を嘆き、自分の魂への配慮をもって道徳的生活を送る大切さを表現したものです。古代のキリスト教教父たちはこうしたギリシャ哲学から言葉や論理を借りてキリスト教の信仰と生活について叙述し、ヘレニズム世界での宣教を可能にしたわけですが、その中でこの「魂

の配慮」という言葉も用い始めています。

しかし、プラトンのそれと違い、自分が自分の魂を配慮するのではなく、神が私たちを愛し、いのちを守られる恵みを与えられること、そしてその神の恵みをさらに他者と分かち合い、一人ひとりの魂を配慮する意味として用いるようになりました。魂と訳される言葉はギリシャ語のプシュケーですが、いのちを表す言葉でもあり、単に魂だけの存在を考えるのではなく、むしろ、身体を伴う私たちのいのちそのものへのケアという意味を持っています。その中核は神の恵みを受け取る信仰であることは言うまでもありませんが、具体的な生活を生きる困難に支援を行ってきた教会の実践が、「魂の配慮」とは「いのちの配慮」そのものであることを物語っているのです。

教会は、ギリシャ哲学とは全く違う神の「魂の配慮」の深い意味を生きてきたのです。

**【ルターと魂の配慮】**

ルターは著作において「魂の配慮」を表す「ゼールゾルゲ」という言葉を同時代の他の神学者に比して特に多く用いたことが知られています。ルターは神学者というより、むしろ一人の牧会者であったとさえ言われます。実際、彼には教義学的に体系的著作はありません。時代の苦悩を生きた一人の信仰者として、ルター自身が受け取った神の「魂の配慮」としての福音への圧倒的な信頼に基づく論争や、同時代を生きる人々への呼びかけ、問われた神学的課題への応答と、教育的な著作が神学的著作となったのでした。そして、実際の聖書講解と説教に加え、人々への牧会的書簡が多く残されています。

重い病人とその家族、死に直面していたり、あるいは大切な家族が亡くなったりした人たち、迫害された者や牢に入れられている者、信仰的な悩みや迷い、不安と絶望にある人たちに向けてルターは一人の牧師として誠心誠意手紙を書いています。彼自身が生きるために必要とした福音を、どうしても分かち合わないわけにはいかないというルターの熱情を表しているのです。これこそ、宗教改革者ルターが、牧会者ルターであったと言われる所以です。

**【召されている私たち：礼拝から派遣】**

ルターは、みことばによって、神の「魂の配慮」を受け取りました。

それゆえに方策では**「『魂の配慮の場(重要キーワード)』としての礼拝」**の重要性を強調しています。説教とサクラメントとは、何よりもこの「魂の配慮」の源泉なのです。それによって養われ、ルター派の教会として、私たちは**「牧会力と分かち合う力の回復」**をいただき、もう一度現代の世界における教会の使命、宣教を生きていくように礼拝から派遣されるのです。

方策は、具体的に私たち信仰者が、**「隣人のために一人のキリストとなる」**こと、また同時に**「隣人と共にあるキリスト」**に出会うようにして**「共にキリストの喜びに生きる教会」**を目指すことを示しています。

神によって全信徒が召されています。ディアコニアも牧会も、特別な職務の者だけのものではありません。一人ひとりが、他者に対して神による「魂の配慮」を証し、いのちを支え合うことへと召されています。他者のために祈り、助け、また支え合う。ここからしか、教会も教区も、関連施設も再形成の道はないのです。

ポストコロナ時代、オンラインや新しいメディアの力を享受して、今や地球の裏側の人と「今、ここ」にいながらにして結びあえます。しかし、同時にその課題も経験していることです。神から与えられた身体を伴ういのち・魂への深い関心・配慮こそが神の恵みなのです。だから、私たちは無関心ではいられません。私たちは、具体的にこの世界において、隣人と共に生きるように召されているのですから。

# 現代社会の課題に応えるために

DPC 運営委員　吉岡　光人

今わたしたちの住む社会はありとあらゆるところがデジタル化されています。わたしが子どもの頃に近未来をテーマにした漫画がたくさんありましたが、そこに描かれていた世界が今や現実のものとされてきました。ワクワクしながら読んでいた「鉄腕アトム」に出てくる、高層ビルが立ち並んだ都市の光景はそのまま実現していますし、人間が動かなくても機械が何でもやってくれる生活も実現しました。主役であるロボットたちは、人間と同じ言語を話し、感情を持ち、人間の心を理解することができます。これもまた現実化しつつあります。わたしたちの生活はこれからもどんどん便利になって行くことでしょう。

しかし鉄腕アトムの作者である手塚治虫氏は、全てがハイテク化された社会、ロボットが代わって何でもやってくれるような便利な社会に対する鋭い警告も作品の中で扱っています。悪人たちがロボットを唆して世界を支配しようと企てたり、環境破壊に心を痛めた学者が動物たちを洗脳して都市を襲わせたり……、現代社会の闇の部分もしっかりと扱っているのです。そして何と言っても極めつけは、アトムの生みの親である天馬博士が、交通事故で亡くなった自分の息子に似せて作ったアトムが「息子とは違う！」と、アトムを捨ててしまったことです。その後、捨てられたアトムはお茶の水博士によって拾われ、心優しい博士は彼のために両親、妹のウラン、弟のコバルトを作ってくれ、アトムには新しい家族ができました。こうしたことも現代社会のテーマと重なる部分が多いと感じます。心の問題は、どれだけ科学や技術が進んでも変わらないテーマであることを、鉄腕アトムは現代のわたしたちに、預言者のように語りかけてくれます。

キリスト教会はこの世の只中に立っています。世の中に迎合することなく、かといって無暗に世と対立することもなく、世にあって、世に流されず、世のために仕える使命が与えられています。

現代日本社会では、ハイテクが進み生活がどんどん便利になっているにも関わらず、日本社会の「幸福度」はとても低いと言われます。「より早く、より無駄がなく、より安く、より楽に、より自由に」という方向で発展してきたこの社会にあって、「幸せだ」と感じられない人々がたくさんいて、昔よりも不安を感じる人々が増えているのです。大変皮肉なことに、先人たちが明るい未来を想い描き、その実現のために努力して築いてきたこの社会が、恐らく彼らが想定しなかったほどにストレスフルな社会になってしまったのです。しかし、現代に生きるわたしたちは、ここから逃げ出すわけにはいきません。むしろここに留まって、失われつつあるもの、あるいは失われてしまった大切なものを、一つひとつ拾い上げて、錆びを落として再生することが必要なのではないでしょうか。その最も大切なものが「人と人との絆」だとわたしは考えています。家族のあり方も地域共同体のあり方も変化した現代社会で、地縁血縁関係や利益共同体ではない「心の共同体」が必要です。

キリスト教会は凡そ 2000 年の歴史の中で信仰による共同体形成をしてきました。初代教会の時代から、教会という共同体がその時代の人たちから好意を持って見られていたと使徒言行録に書かれています。それは恐らく教会の「幸福度」がとても高いことを人々が感じ取っていたからでしょう。教会には生活困窮者、差

別されていた人々、家族を失った人々、寄留の人々……、実に様々な人々が集まっていたわけですが、彼らはモノを分かち合うと同時に喜びを分かち合い、悲しみも分かち合い、痛みも分かち合い、苦しみも分かち合っていました。「共感性の高い」共同体だったのです。その教会の姿こそ、現代社会に欠けているものを満たすことができる可能性を持っているとわたしは確信しています。

コロナ禍で物理的に人間関係が寸断されてしまいましたが、「人間の心の絆まで断ち切られてしまった」と嘆く人も少なくありません。現代社会の脆弱さが露わにされてしまったのです。さまざまな困難があってもなお絆を結ぶ「共感性の高い」社会の実現のために、わたしたちは小さな奉仕を続けて行くのです。DPC は、その「小さな奉仕」のために、研究と実践を重ねてきたと思います。そしてその必要性はますます高まっていると感じます。複雑でストレスフルな現代社会にあって、傷つき倒れた人々に寄り添ってゆくためにも、さらにその働きが用いられることを期待しています。

## Dale Pastoral Center　臨床牧会セミナー　牧会力を高めるために

DPC は設立以来、臨床牧会セミナーを５回行なってきました。神学校が毎年開催してきた教職神学セミナーを、隔年で、教会が今直面をしている牧会現場にフォーカスを定めることとしたのです。
各回のテーマは下記のとおりでした。現代を生きる私たち自身がいかに深い闇に包まれているか、いや、私たち自身のうちに闇を抱えているという現実に向かい合ってきたかということがよく分かります。
神による「魂の配慮」を、なんとかして今苦しんで来る一人ひとりと分かち合いたい。教会の皆さんの熱情を、DPC の取り組みとしてきたように思うのです。(石居基夫)

**第１回**（2015 年２月）　**「それでも、主を見上げて～牧会の光と闇～」**
基調講演：「ルターと牧会」鈴木浩
分科会：①グリーフケア（大柴譲治)、②教会と人間関係（堀肇)、③牧師のメンタルヘルス（石丸昌彦)、④高齢者と教会（賀来周一）

**第２回**（2017 年２月）　**宗教改革 500 年記念「時代を生きる苦悩～魂にふれる牧会」**
基調講演：「青年ルターと＜こころ＞の問題」江口再起
分科会：①教会と青年（松谷信司)、②女性と DV 問題（松浦薫)、③ジェンダー（平良愛香)、④自死と牧会（賀来周一）

**第３回**（2019 年２月）　**「危機のただ中に立つ牧会　～あなたを支えたい～」**
基調講演：「ぶっ壊して、造り上げる牧会のダイナミクス」関野和寛
分科会：①心の病～牧会者として心得ておきたいこと（河村従彦)、②教会とハラスメント（城倉由布子)、③現代の結婚事情を考える（堀肇)、④高齢者の危機―その援助と克服を考える（賀来周一）

**第４回**（2021 年２月）　**「いま、教会の牧会は～ COVID-19 の只中で見ていること～」**
講演Ⅰ：「新しい牧会様式」吉岡光人、　講演Ⅱ：「見よ、今や恵みの時、見よ、今こそ救いの日～豊かなる大地に守られながら、一人ひとりに寄り添って～」武井陽一、　講演Ⅲ：「マルタたちの居場所　イエスのキッチン」梁熙梅

**第５回**（2023 年２月）　**「暗闇の中で　助けを必要とする牧会者」**
基調講演：「暗闇の中で　助けを必要とする牧会者」石居基夫
発題：小勝奈保子・秋久潤、全体ファシリテーター：三村修

**第６回臨床牧会セミナーは 2025 年２月開催予定。**

## この一冊

『パンデミック、災害、そして人生におけるあいまいな喪失－終結という神話－』

ポーリン・ボス著
瀬藤乃理子/小笠原知子/石井千賀子訳
誠信書房　2024 年

新型コロナウィルスのパンデミック只中で執筆された本書の英語タイトルは、The Myth of Closure: Ambiguous Loss in a Time of Pandemic and Change です。著者のポーリン・ボスは、1970 年代に〈あいまいな喪失〉というグリーフの概念を提唱しました。〈あいまいな喪失〉とは、たとえば大切な人が行方不明である場合に、身体的には〈不在〉でも心理的には〈存在〉し続けるなど、不確実な状況で解決も決着もないような状態をさします。また、家族の認知症が進んできている場合に、身体的には〈いる〉けれど、心理的には〈いない〉ような感覚を抱かざるを得ない状態をさします。他にも今回のパンデミックにおいて、安心と安全の境目が変化し、怒りと共に無力感など両価的な感情を抱き、身動きのとれないような状態も含みます。

こうした終わりのない〈あいまいさ〉を抱えながら生きていくために、著者は 6 つのガイドラインを提示します。たとえば、両価的な感情を正常なものとみなすこと、コントロール感を調整すること、喪失に意味を見つけること、などです。これについて序文で柳田邦男氏は「時代を超えた普遍性をもつもの」と言います。

死別を悼む人に対して、しばしばそれを乗り越えること、区切りをつけることが大切であると言われます。しかし著者は、生命の終わりが築いてきた関係性の終わりではなく、周囲が相手の悼みに一定のプロセスを当てはめないことの重要性を説きます。「(死別後に) その人との関係性を終結する必要はないのです。私たちは一生の間に経験してきたすべての人間関係の積み重ねの上に、今の私たちがあります。古い関係性も新しい関係性も、良い関係性も悪い関係性も、すべては私たちの今を作ってきたものなので、私たちはすべてを抱えて生きていくことができるのです」(p.95)。

DPC ソーシャル部門では、死別を体験した子どもと保護者をサポートする活動を開催しています。グリーフは個別的で〈わかる〉ことは不可能です。そのグリーフに傍らでともに在ることによって、終結のない喪失との〈おりあい方〉を見出し得るのだと、この 1 冊を読みながら考えました。〈あいまいな喪失〉を熟知した訳者たちによる書でお薦めです。　(DPC 所員　小嶋リベカ)

●**「神はいずこに　聖なる神秘の黙想」ケネス・J・デール著、谷口真理子訳・DPC 監訳、キリスト新聞社、￥1,320**
多数お買い上げいただき感謝いたします。まもなく完売となります。ご希望の方は事務局へご連絡ください。

●**グリーフサポート「だいじな人をなくした子どもの集まり＆保護者の集まり」**今後の日程は以下のとおりです。必要な方にご紹介ください。7/27・9/28・11/30・1/25・3/22 (土) 午後 1 時 30 分 - 4 時 atsumari.g.7830@softbank.ne.jp

●**第 7 回デール記念講演会**　今秋（日程調整中）若林一美先生（元・立教女学院短期大学学長）を講師にお招きし「グリーフ」をテーマにお話をいただきます。日程および詳細は決まり次第 HP でご案内いたします。

**☆編集後記☆**

DPC10 年のあゆみを振り返る 1 年は本学の大きな決断の時と重なりました。DPC の存続についてもご心配のお尋ねをいただきました。こうして振り返ってみますと、この小さな歩みにも一つひとつ確実な意味のあったことを思います。引き続きのお支えをいただけますように、そして皆様のお祈りにお覚えくださいますようにお願い申し上げます。　(ふ)

発行：日本ルーテル神学校 附属研究所　デール･パストラル･センター　　発行人：齋藤　衛
181-0015　東京都三鷹市大沢 3-10-20　TEL:0422-26-4580（直通）　E-mail: dpc@luther.ac.jp　http://www.luther.ac.jp/lutheran/